

しました。実際に行なってみると摩擦のため砂はほとんど流れません。しかし、重曹入りの熱した砂を流すと、発生した炭酸ガスの影響で樋の下まで一気に流れます。表面にローブ状の微地形も形成され、火砕流の堆積状況にそっくりです。皆さん、砂はサラサラと流れると思っているせいか、先に重曹入りの砂を流すと、「こんなものだろう」とたいして驚きません。ただの砂を流してからではないと驚きは少ないようです。砂は、粒度のそろったもの(極細粒砂)を使いましたが、灰をまぜると“火砕流”の上面に灰神楽が舞い、より一層、本物の火砕流に近いものになりました。

実験は、合計6回行いました。開始直前に熱しすぎた鍋に穴が空いたりするトラブルもありましたが、滞りなく行えました。天気にも恵まれ(晴れ、気温31℃)、標本館の前という良い立地も手伝い、多いときは100人ほどの観客が集まりました。ただ、高温の砂を流したため、子供に実験に参加してもらうことが難しく、子供たちにとって今一つ印象が薄かったかもしれません。今後は子供たちにいかに安全に実験に参加してもらうかが課題でしょう。また、単純に驚いてもらうためには規模も大きくする必要があります。それも今後の課題です。

「たたいて知ろう、地下の様子！」

伊藤 忍 (地質情報研究部門)

地質情報研究部門地殻構造研究グループでは、地下構造調査のデモを行いました。これまで当グループでは、このようなイベントへの出展に躊躇がありました。使用していた探鉱機が老朽化のため頻繁に熱暴走していたためです。また、OSがMS-DOSであったため、ビジュアル的に貧弱であったことも理由のひとつです。新しい探鉱機を導入したのをきっかけに、今回の出展を企画してみました。

もっとも気を使ったのは安全管理です。サウンド的に受けるであろうということで、震源としてドロップヒッターを使用しました。しかしながら、来場者が近づき過ぎると危険なのではないかと、他のブースの迷惑になるのではないかとという心配がありました。また、テントの近くにケーブルがトグロを巻いていると来場者が躓いて転倒するのではないかとという心配もありました。そのため、機器はテントからなるべく遠ざけ、三角コーンをたくさん使って注意を促しました。結果的にはやや過剰な配慮だったようでした。遠くで足を止めて注目してくれる来場者は大変多かったと思います。震源の近くまで来てくださる方も大勢いらっしゃいましたが(写真)、配置をうまくすればさら

に多くの方に足を運んでもらえたと思います。

今回は初めてだったこともあり、手探り状態での出展となりましたが、来場者がどういうものを期待しているのかが理解できました。すでに来年度の構想もできつつありますので、どうぞご期待ください。



写真 発震のデモを見る来場者。左端の方が耳を塞いでいるのに注目。田中明子氏撮影。

「水路に砂を流してつくばの地形を作ろう！」

宮地 良典 (地質情報研究部門)・澤田 結基 (地質標本館)

地質標本館では従来より小学校6年生の校外学習として見学を受け入れてきた。小学生の団体見学に対しては、館内の案内のみならず希望により小学校の理科で学習する「流水のはたらき」にちなんだ教材として水路実験を見せることも行ってきた。

今回産総研つくばセンター一般公開において同様の実験を行い、流水のはたらき、三角州の形成及び段丘の形成に

関する実験を行った(写真)。

三角州の形成 三角州の形成は従来から知られている実験ではあるが、透明アクリルの水路に水と様々な粒度の砂を流し、海としている滞水域にたまる状況を見ていただいた。簡単に前置層がみえ、堆積物の量を多くすると川をさかのぼって扇状地性三角州が形成される様子を見ていただいた。

段丘の形成 今回使用した水路には、海水準を変えるため

に水の出口にあたる部分を2段階に変えることができるようになっている。水位を下げると海水準が低下し、段丘が出来る。簡単な実験のようであるが水路の傾斜や水の量、これに応じた砂の供給により、毎回違う現象となる。

つくばの地形 つくば市の地形は12万年くらい前の温暖期に出来た台地と、それを削り込む低地（桜川低地・小野川低地など）で特徴付けられる。この実験を通じて今日来た道や家のまわりの地形を思い出してもらい、つくばの環境地質図とあわせてみた。当日多くの方が参加してくださり、大変興味を持っていただいたが、十分対応しきれなかったのが残念である。



写真 水路実験の様子。

「地震で起こる地盤の液状化を実験しよう！」

兼子 尚知・宮地 良典（地質情報研究部門）

このブースでは、各地のイベントで用いている地盤の液状化実験ボトル「エキジョッカー」や「エッキー」などを使って、地盤の液状化で発生する種々の現象をみなさんに体験していただきました。

当日は日差しが強く、野外の実験ブースはとても暑くなりました。毎年、一般公開はこの暑い時期に開催されますので、この時期ならではの水遊び感覚の実験も行いました。砂を入れたコンテナボックスに、しぶきを受けながら水を満たし、穴の空いた蓋とおもりを載せると準備完了。コンテナを載せた台車ごと揺らすと、蓋の穴から水柱とともに砂が噴き出てきます。来場したお子さんたちは、みんな大怪獣になったかのように交代で台車を揺らしていました。エキジョッカーは500mlペットボトルを利用していますが、約15倍の大きさの亚克力容器で作った大型エキジョッカーの実験では、ゴムハンマーを使って容器に振動を与えます。これも交代でゴムハンマーの打撃をしたみなさんは、気分爽快とといった表情をしていました。

地盤の液状化は、みなさんが大きな関心を持つ現象です。ご自分の自宅や職場の周辺で発生するのか否か、とても気になる様子でした。しかし、具体的にどのような現象なのか、どういった被害が生じるのかということは、実感としてつかめていない方が大半です。実験を行い、そこで起こる現象を観ると、歓声があがりました。砂が噴き出したり、玉が浮いてきたりする様子は、それ自体おもしろいものです。ところが、実際に地盤の液状化が発生した現場の被害写真を

示しながら、いま観た実験と比較して説明すると、みなさんの表情が曇りました。実験と現実のギャップの大きさに、とまどいを感じるのでしょうか。それでも、ひととおりの説明を聴き終えると、実験で地盤の液状化をご自分の目で観察することができたためか、納得顔となりました。

地盤の液状化がまさに発生しているその場に居合わせる“機会”は、滅多にあることではありません（できれば遭遇したくないものです）。それゆえに、地震の揺れと異なり、地盤の液状化という現象が、実感として捉えにくいものとなっているのでしょうか。このような簡単な実験によって地盤の液状化への理解が進めば、被害を軽減する対策が、より促進されるものと期待されます。



写真 説明に耳を傾ける参加者。

「重力流による自然災害を実験で考えてみよう！」

吉川 秀樹（テクニカルセンター）・野田 篤・七山 太（地質情報研究部門）

テクニカルセンターの吉川と地質情報研究部門の野田・七山の3名が協力し、「重力流による自然災害を実験で考えてみよう！」と題した出展を行った。我々の担当したチャレンジコーナーは特に小学生高学年を主な対象としており、今回は「地すべり」、「天然ダム決壊により発生する土石流」および海底の「タービダイト」等の重力流と自然災害の関わりを分かりやすく再現する実験ショー形式とした。この企画実施の為に、我々は約3ヶ月前から入念に実験の準備を行ってきた。特に、チームリーダーである吉川は、今回の一般公開のために、5種類の装置を新たに考案した。

(1) 簡易式地すべり発生装置

長さ1m、幅30cmの木板に縁枠を付け、20度傾斜させて人工地盤を作成した。その上に若干湿り気を与えた砂を台地状に盛り、その上におもちゃの家、木と人形を載せ、リアリティーを再現した。そこに子供が霧吹きで多量の雨を降らせ、人工的に地すべりを発生させた。この実験では、斜面の粗度、傾斜角と水分量によって地すべりの形態が大きく変化するので、事前に上手く地すべり面や地すべり地形が生じるように、実験条件を予め設定しておいた。

(2) 回転型重力流発生装置

コア径φ65mm、長さ2mになるパイプに粒径の異なるガラスビーズ3種類と水を封入して回転スタンドに固定した。これを適当な角度に傾斜させて、見学者にガラスビーズが流れ下って生じた重力流を見せ、最後にパイプを垂直に立てて、タービダイトの級化構造を再現して見せた。傾斜角によって重力流の流速も自在に変えられる点がこの装置の特徴と言える。

(3) 卓上平型重力流発生装置

卓上平型重力流発生装置3種類については、特に、アクリル容器に封入する粒子について検討を行い、微小なガラスビーズを比較的多めに入れ、重力流を発生しやすくなるように工夫した。

(4) 天然ダム決壊を可視化する実験装置

天然ダム決壊を可視化するために、幅10cm高さ20cm長さ1mのアクリル水路を事前に作成した。傾斜させた水路の中央に盛砂をして、徐々に水を上流から流しダムを発生させ、更なる水位上昇によって天然ダムが自然に決壊し土石流が発生する様子を復元した。

(5) 水槽での重力流発生実験装置

長さ120cmの実験水槽に水を張り、半割したアクリルパイプを斜め20度で水中に挿入して海底チャンネルに見立て、そこに流水によって砂を水中に流し込み、重力流を発生させた。この実験では、水中での懸濁させた砂の見栄えが良く、さらにチャンネル出口に出来た海底扇状地の地形も上手く復元出来た。

一般公開当日にて、上述の実験装置の評判は概ね良好であった。まず、回転型タービダイト発生装置については、2mのパイプが見学者の目の前で大きく回転し、ガラスビーズが重力流を発生させながら滝のように流れ落ちる様が、見学者の関心を引き付けたようだった。この実験装置は、子供以上に地質分野の専門家からの受けが良く、我々としては予期せぬ反響であった。また、机上平型重力流発生装置は、堆積構造を確定してから左右に傾け、重力流を自由自在に発生させることができる。自由に見学者に触れてもらいタービダイトの発生の様子を十分イメージしてもらえたと思う。来訪された教育関係者からの教材化の問い合わせが数多くあった。

地すべり、天然ダム決壊実験、水槽での重力流発生実験については主に野田が野外で担当した。特に、低年齢層の見学者が「砂遊びや水遊び」の延長的感覚で参加していたようで、概ね好評であったと我々は考えている。但し、室内のパネル会場と野外の実験会場間に距離があり、両者の連携にはやや課題が残った。

なお、いずれの実験装置も更なる改良の余地が有りそうなので、来年以降の産総研一般公開や地質情報展等で、改良型を出展したいと我々3名は考えている。



写真1 吉川の開発した回転型重力流発生装置および卓上平型重力流発生装置。



写真2 吉川、野田と子供による野外での重力流発生実験。

「地質図が語る だいちのふしぎ」－ 地質図ライブラリー －

中澤 都子（地質調査情報センター）

このブースは、地質図をより身近に感じてもらい、特に小中学生の中から将来の地質学者が誕生してくれればと願ってはじめて、今年で4回目となります。入場者は年々増加し、今年は1,135名の方々が訪れて下さいました。

今回の展示は、簡単な工作から貴重な地質図や地質調査方法の説明まで、8つのコーナーなどを設けることで、幅広い年齢の皆様に満足していただけたと思っています。

ロビーからの案内は特大ジオ君のパネル、そして、会場では段ボールで作成した恐竜たちが出迎えます。入るとすぐにプリズムメガネを通しての伊豆沖から関東平野に向かって三次元の立体地形図を楽しみます（写真）。そして恒例の貴重資料展示「1952年米軍作成関東甲信地域の“立体”地形図」を見ていただきました。

その後は立体シームレス地質図の上空を飛び回れるフライトシミュレータや「ジオドクトル」に1点としてカウントされる「産総研ありす・産総研でれす」と「ジオ君」のしおり作りなどに子供たちは夢中で取り組んでいました。用意していたしおりは好評で何回も台紙を印刷することになりました。

また、フィールド調査のコーナーでは毎年説明者を独占するほど熱心な方がいらっしゃいます。今年も予想通りでした。展示された岩石や標本に釘付けになり、用意した石のパンフが足りなくなり急遽補充する一幕もありました。

地質図展示では、常設展示の「100万分の1地質図初版、第2版及び第3版」を始め、「2万5千分の1筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図」、貴重な「日本蝦夷地質要略之図」、海外の地質図のコーナーでは、ヨーロッパの観光地（モンサンミッシェルほか）やオーストラリアのエアーズロックの地質図を紹介しました。このような機会がないと目にするのでできない地質図類に入場者はとても興味深く閲覧されていました。

しおりコーナーの奥は、地質調査に使用済で、不要と



写真 足下の立体地形図を眺める来場者。

なった地質図類の再利用エコバックとメモ帳工作です。色鮮やかな地質図類を使ったエコバックは、仕上げにリボンの持ち手とGSJのロゴマークを貼付します。これは、学齢前のお子さんから高校生まで（大人も）人気があって、みなさん黙々と作業を行い、できあがったバッグには自分で作ったしおりやメモ帳を入れて、お土産として持って帰られました。

たくさんの来場者で室内の温度は上がりっぱなしでしたが、楽しい工作や地質図のおもしろさを思い出に会場を後にする来場者の方々から、感謝の言葉もいただくことができました。出口の廊下には「ジオドクトル」証明書発行所が設置され、この立地条件がよかったことが入場者増加の1つの理由かとも考えています。

今回の反省点としては、1,000人をこえる入場者は予想をはるかに超えており、職員の交代要員確保が十分でありませんでした。次回は来場者に適切な説明ができるよう、人員配置の再考が必要のようです。また、地質図やフライトシミュレータにも可能であれば地名をいれるなどの工夫があると良かったかもしれません。これらは次回への課題といたします。

「地質図が語る だいちのふしぎ」－ フィールド調査紹介コーナー －

濱崎 聡志（地質調査情報センター）

地質図を作る際の野外調査を紹介するため、地質図ライブラリーの一角に、調査で使う一般的な道具と、地質図を構成する実物の岩石を展示するコーナーを設けました。訪れる人の興味は様々で、「クリノメーターはどうやって使うの?」「地質図の色は岩石の色を表しているの?」「地質図を作るのに何日くらい調査するの?」など多くの質問が寄せられました。また、筑波山の地質図と花崗岩類も合

わせて展示し、身近な山がどんな岩石でできているのかという話にもみなさん熱心に耳を傾けてくださいました（写真）。地質図に興味を持ってくれる方が予想以上に多く、嬉しく思いました。また、高校で地学を習わない大学生が多かったことも、私の世代には驚きでした。

一方、子供たちの多くは、いろんな色の岩石に興味をもったようです。「触ってみていいよ」と言うと、さっそく気

に入った石に手を伸ばし、片っ端から持ち上げ始めました。最も人気が高かったのは軽石です。展示では軽石の隣に同じくらいの大きさの砂岩を並べておいて、砂岩、軽石の順に持たせるようにしていました。すると、初めて軽石を見る子供たちは！！？という表情で、「石なのにどうしてこんなに軽いの？」「僕って力持ちになったの？」と言わんばかりに何度も持ち比べていました。大人の方には、「岩石がどこでどうやってできたのか」ということを、火山から河川、海洋などの模式図を使いながらお話ししました。この日の実体験が少しでも子供たちの印象に残ってくれたらと願う一日でした。なお、一部の岩石標本は地質相談所ならびに地質標本館からお借りしましたこと、記して御礼申し上げます。



写真 フィールド調査の説明の様子。

地質分野有志企画「ジオドクトル2009」コース

住田 達哉・伊藤 順一・名和 一成・宮地 良典・七山 太・高田 亮・伊藤 忍（地質情報研究部門），吉川 秀樹（テクニカルセンター），大和田 朗・佐藤 卓見・福田 和幸（地質標本館），中澤 都子（地質調査情報センター），今泉 博之（地圏資源環境研究部門），今西 和俊（活断層・地震研究センター）

今年的一般公開では、「ジオドクトル2009」コースという地質分野ブースの有志企画を行いました。「一般公開を見に来てくださるみなさんの感想を頂き、次年度以降の展示にフィードバックさせて、より良い一般公開を実現したい！そのために、何かしら参加者のみなさんに喜んでいただける企画を・・・」という思いで、住田から広報部河村さんへかけた一本の電話ですべてが始まりました。あれよあれよと、地質調査情報センターまで話が伝わり、一時は、地質分野全体で取り組むのか？とか、JSTの「地域ネットワーク支援」との連携も模索されましたが、残された準備の期間等も充分とは言えず、地質分野内での議論も十分でなかったことから、企画の趣旨に賛同する有志による特別企画として実行することになりました。

内容は、本企画に参加するブースがフィールドノート（図1）と称するブース担当者の作成した資料を使って展

示を行い、参加者のみなさんが所定の数のフィールドノートを集め、「ジオレポート」と称する感想文を提出していただくと、「ジオドクトル2009」の証明書（図2）をもらえるというものです。

事前の宣伝は全くなく、賛同いただいたブースでのA3ポスターとフィールドノートの説明書き、およびブース担当者の口頭説明のみでしかお知らせできなかったのですが、おかげさまで27名の参加者に「ジオドクトル2009」の証明書をお渡しすることができました。仔細は、地質ニュースでご報告できればと思っております。

実現に際しては、広報部、地質調査情報センター、第七研究業務推進室、地質標本館および地質写真コンテストの入賞の方々等、たくさんの方にご協力を賜りました。どうもありがとうございました。

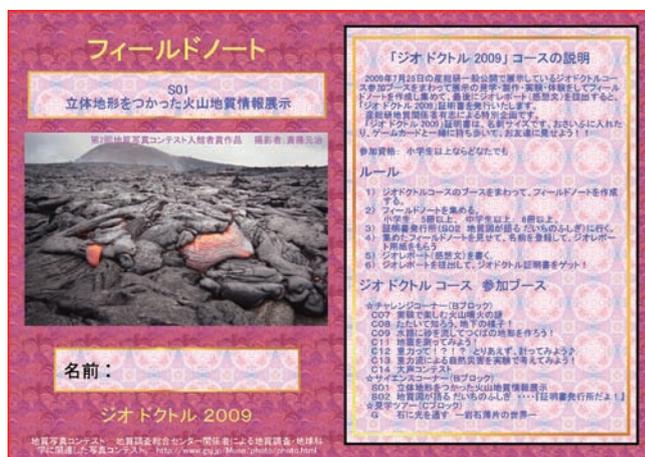


図1 フィールドノートの表紙の一例。各ブースごとに地質写真コンテスト入賞作品から写真を選定しました。



図2 証明書のデザイン。実際の証明書は、No. および参加者氏名を書き込んだ上で、名刺プリンターで打ち出して、お渡ししました。ジオ君の使用に関しては、広報部の河村さんおよび地質情報出版室に便宜を頂きました。

地質標本館 夏の特別展「ジオパークへ行こう！」の開催と特別講演会

澤田 結基（地質標本館）

地質標本館では、産総研一般公開に先立つ7月22日より、夏の特別展「ジオパークへ行こう！」を開始しました。この特別展では、2008年12月に誕生したばかりの全国7カ所のジオパークの見どころや地質学的背景を、パネルと岩石・鉱物・化石などの地質標本の展示によって紹介しています。ジオパークとは、地球の営みの遺産を主な見どころとする自然の中の公園です。

この特別展では、各ジオパークの運営組織から多くの協力をいただきました。地元の博物館や自治体の担当者の方に執筆していただいたパネルでは、ジオパークの概要のほか、代表的な見どころ（ジオサイト）の解説、そして地元ガイドさんのおすすめスポットを紹介しています。展示会場では、各ジオパークからお借りした岩石、鉱物、化石も合わせて展示しています。そのなかには糸魚川のひすい、玄武洞の柱状節理の敷石、戸台層のアンモナイト化石などが含まれています。

また、特別展のパネルでは、茨城県からジオパーク申請を目指す動きのある県北地域（袋田の滝、五浦海岸）と、県南地域（筑波山と霞ヶ浦）の見どころも解説しています。県北のパネルでは、茨城大学の学生が中心となって活動している地質情報活用プロジェクトの協力をいただきました。展示パネルをまとめたパンフレットは、ジオパークのよいガイドになっていますので、ぜひお手にとってご覧ください。

関連イベントとして、産総研の一般公開日である7月25日には、地質標本館特別講演会「ジオパークへ行こう！—地球はもっとおもしろい—」を開催しました（写真）。講演者は地質情報研究部門の渡辺真人氏です。講演会には

80人の参加者があり、子ども連れ、大学生から年輩の方まで様々な方がいらっしゃいました。渡辺氏は、日本ジオパーク委員会を運営する中心メンバーとして、ジオパークの設立に尽力されています。講演では、日本のジオパークのなかから、洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島の合計3ヶ所の見どころや地質学的な背景が、地域の文化や歴史の話題とともに解説されました。渡辺氏の熱のこもったお話に、会場の参加者は熱心に聞き入っていました。質疑応答も活発で、講演会が終了したあともしばらく続いていたようです。

現在、3ヶ所のジオパーク（洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島）が、ユネスコの支援する世界ジオパークネットワーク加盟に向けて審査中の状態です。もしかしたら、世界ジオパークの認定決定が、特別展の会期中にあるかもしれません。ジオパークを巡る展示期間中の動きは、随時特別展会場のなかに反映させたいと考えています。



写真 講演会の様子。会場ではメモを取る方が多く、熱心に聞き入っていました。

第5回日本ジオパーク委員会の開催

中島 礼（地質調査情報センター）

7月10日に経済産業省別館会議室において、第5回日本ジオパーク委員会が開催されました。昨年度の委員会において、7地域の日本ジオパークが認定され、そのうち3地域を世界ジオパークに推薦することになりました。今年度は、6月19日に世界及び日本ジオパークへの新規の申請が締め切れ、それを受け今回の委員会は、世界ジオパーク候補へ申請した室戸、秩父、山陰海岸の3地域、日本ジオパークへ申請した御所浦（天草御所浦）、阿蘇、隠岐、福井（恐竜溪谷ふくい勝山）、白滝（白滝黒曜石遺跡）の

5地域（括弧内は申請ジオパーク名）の関係者によるプレゼンが行われました。

午前には3地域の世界ジオパーク候補の審査が行われました。室戸と山陰海岸は昨年すでに日本ジオパークに認定されており、世界ジオパークへのステップとして、現地での活動が自治体の首長や地元の議員によって紹介されました。一方、秩父はいきなりの世界ジオパーク候補への申請でした。秩父は「日本地質学発祥の地」として知られ多彩な地質現象を有しているため、ジオパークとしての価値も

高い地域です。午後は5地域の日本ジオパークへの審査が行われました。どこも地域名を聞くだけでどのような地質現象があるのかが想像できるほど有名な地域でした。天草御所浦と福井は中生代の化石、阿蘇は火山、隠岐はアルカリ火山岩の島嶼、白滝は黒曜石の産出と遺跡というものが大きなテーマで、それぞれの地質を活かした歴史や文化活動について紹介されました。古生物学が専門の著者としては、恐竜の産地として有名な御所浦と福井のプレゼンに注目しており、実際に化石発掘体験ができる両地域は高い人気を得ることは確実で、ジオパークとして認定されることを個人的に期待しています。

プレゼンが行われた8地域については、どこもガイドを付けたジオツアーやジオサイトの解説などが自治体と研究者（あるいは機関）が共同で実行され、地域交流も行われており、ジオパークとしての可能性は十分秘めているように感じられました。ただ、委員会の審査の議論を聞くと、地質遺産を売りにした観光地とジオパークは全く概念が異なり、これまでの活動や自然保護、地域発展を考慮した上でのジオパークの認定は簡単ではないようです。また、世界ジオパークの状況を知っている委員によれば、日本ジオパークから世界ジオパーク候補へのハードルはとて高いようです。ただ、審査中の議論を聞くと、日本から多くのジオパークを誕生させたいという委員の皆さんの情熱が感じられ、多くの建設的な意見やコメントが交わされました。



写真 天草御所浦担当者によるプレゼンの様子。

今後のジオパーク活動の動向ですが、8月下旬には中国泰安で「第3回ジオパーク活動の発展に関する国際シンポジウム」が開催され、昨年度に世界ジオパーク候補となった糸魚川、洞爺湖有珠山、島原半島地域の世界ジオパーク認定の可否が決定されます。また、今回の第5回委員会では書類とプレゼンの審査が行われましたが、7月から9月にかけて今度は現地審査が行われます。以上の審査をした上で、9月以降に行われる第6回日本ジオパーク委員会において、世界ジオパーク候補と日本ジオパークが決定されることとなります。

スケジュール	
7月21日～9月27日	地質標本館特別展「ジオパークへ行こう！」 http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2009/geoperk/index.html
9月5～6日	地質情報展2009おかやま（岡山デジタルミュージアム） http://www.gsj.jp/johoten_2009/index.html
9月4～6日	日本地質学会第116年学術大会（岡山理科大学） http://www.geosociety.jp/okayama/content0001.html
9月11日	ジオネットワークつくば 第1回サイエンスカフェ（つくば エキスポセンターレストラン滝）
9月26日	ジオネットワークつくば 筑波山へ行こう（仮）
10月7日	ジオネットワークつくば 第2回サイエンスカフェ（つくば エキスポセンターレストラン滝）
10月9日	地域地盤協議会 意見交換会（秋葉原、富士ソフトアキバプラザ）

GSI Newsletter No.59 2009/8

発行日：2009年8月24日

発行：独立行政法人産業技術総合研究所
地質調査総合センター

編集：独立行政法人産業技術総合研究所
地質調査情報センター
脇田 浩二（編集長）
藤原 智晴（編集担当）
志摩 あかね（デザイン・レイアウト）

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672



編集後記

藤原 智晴（地質調査情報センター）

いつになく涼しい夏・・・と油断していたら、一般公開当日は強い日差しが降り注ぎ夏らしい一日となりました。雨の心配ばかりしていたので、日焼け対策をすっかり忘れていてひどい目に遭ってしまいました。今年のつくばは、さっぱり降らない梅雨、暑くならない夏と、変な気候が続いていますが、秋の気配とともに梅雨や夏でも衰えなかった新型インフルエンザ感染が増えているようで心配です。感染防止のため、外出したらうがい・手洗いはもちろん、咳エチケット・人混みでのマスク着用などをお忘れ無く。

GSI ニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

地質調査総合センターホームページ
<http://www.gsj.jp/>